

第1回国連海洋科学の10年に関する研究会  
議事概要（未定稿）

日時： 2020年11月6日（月） 10:30～12:30

場所： 笹川平和財団ビル11階国際会議場／オンライン（TEAMS）

資料：

資料1：日本ユネスコ国内委員会について（文科省）

資料2：水産資源・生物多様性（牧野委員）

資料3：海洋ごみ問題について（環境省）

資料4：e-ASIA 共同研究プログラム（JST）

資料5：事例集について・依頼事項、報告事項について（事務局）

資料5別紙：国連海洋科学の10年事例集調査票（集計結果）（事務局）

※以下 国連海洋科学の10年を「Decade」と略記する

## 1. 開会

開会に際して、坂元共同議長、角南共同議長、猪口議員より挨拶が行われた。

坂元共同議長：Decade は科学者のみならず多様なステークホルダーによる協力が必要。

また、社会全体において海洋科学の重要性と海洋科学が持つ価値が認識される必要がある。本研究会では、日本の英知を結集しこの分野で先導的な役割を目指したい。

角南共同議長：Decade は政府でもしっかり支えて頂きたいが、民間としてできることをアジア地域を中心として全世界的に連携して、我々にこそできる推進も考えたい。これからの10年間海洋科学を支えるため民間が一つのグループとなって考えていく研究会は我々にとっても非常に重要なプラットフォームである、先生方のご協力をお願いしたい。

猪口議員：SDGs 完成の Last Decade を国連が海洋科学の10年と定めていることに深い意味があると思われる。研究は教育があってこそで、科学－教育－海洋の3つが Decade の柱となる。先生方の力強い科学に支えられる政策、科学の先導があって最大多数の最大幸福が実現できる、という流れのため重要なインプットを求めたい。

## 2. 議事

### 2. 1 出席者紹介、資料確認

事務局より出席者の紹介、資料の確認等が行われた。

### 2. 2 日本ユネスコ国内委員会について

文科省の田口国際統括官より資料1を利用した説明が行われた。Decade の事務局である

IOC-UNESCO、日本ユネスコ国内委員会、UNESCO 事務局体制の概略に続いて、昨年開催された IOC-WESTPAC 会議の様子が報告された。内閣府総合海洋政策本部やその他の関係機関等と連携しつつ、多様なステークホルダーを巻き込んだ取組とすることを目指して、周知・普及活動などを実施していくことを説明のうえ、産学を含めた後押しを求めた。

質疑では、高橋委員から国内委員会の IOC 担当による Decade へのフォローの有無が問われ、道田委員が IOC 分科会主査としてフォローの現状を説明した。猪口議員からオードリー・アズレー UNESCO 事務局長への日本の活動状況のインプットを問われ、田口国際統括官がアズレー氏にインプットしていく旨を回答した。

## 2. 3 関連分野の取組みについて

### ◆水産資源・生物多様性

牧野委員から、資料 2 に従って水産資源・生物多様性の現状と共に、Decade で求められる海洋科学の方向性とそこでの日本の役割、海洋政策学の方向性について説明が行われた。インドネシアの「FishGIS」や、IUU 監視の Global Fishing Watch 等の事例を交えながら、ステークホルダーとの超学際研究、セクターを横断して複数の目的を目指すネクサスアプローチ、科学に基づく省庁間連携・調整とシナジーの設計について説明した。

質疑では、坂元共同議長から中国の漁場管理の現状および中国研究者との水産分野における研究者交流について問われ、牧野委員が研究者同士に限らず行政とも交流できていること、民間外交による科学的支援の可能性を示唆した。高橋委員からアジア地域の多様性に富む魚介類の利用について問われ、牧野委員は海の中の再生産から食卓での消費までの流れ全体を持続可能に滑らかにしていくことの重要性、地域の生態系を反映した食文化・流通の仕組みへの期待を述べた。井田委員から漁業資源管理における反省、アジアに向けての貢献について問われ、牧野委員からは日本の漁獲量減少についてそれぞれの要因に即したアプローチの重要性、Decade に乗せてリテラシー・教育を学生だけでなく社会人を含めて沢山の方に関心を寄せてもらえるよう日本全体で進めることの希望が述べられた。田口国際統括官からは超学際研究、ネクサスアプローチ、科学に基づく省庁間連携・調整とシナジーの設計の 3 点の組合せ方を問われ、牧野委員は現場ベースでの柔軟な取り組み、政策学会による提言等の横断的役割の重要性について回答した。

### ◆海洋ごみ

環境省・山下室長より、資料 3 に沿って海洋ごみ問題の現状と共に、環境省の関連事業、民間企業の協力、G20 大阪ブルー・オーシャン・ビジョンの実施枠組み、2019 年 5 月策定の「海洋プラスチックごみ対策アクションプラン」について説明が行われた。

質疑では、道田委員から海洋プラスチック観測ガイドラインの「その先」の展開、IOC や UNEP、G7/G20 に打ち出す際の方針についての意見が出された。佐藤慎司委員からは海洋

プラスチックごみ削減に向けた賦存量推定に関する科学技術の貢献についてコメントが出された。井田委員からは海洋プラスチックごみのグローバルな分布追跡とマイクロ・ナノサイズのプラスチックの影響について問われ、山下室長から東京海洋大等の調査船からの情報収集とマイクロプラスチックの有害性に関する研究についての進捗が示された。その補足として道田委員からグローバルマッピングおよびデータベース化の各国間連携、ナノプラスチックの生体影響研究の進捗について説明が行われた。橋本委員からは日本工学アカデミーでの海プラ問題研究会の発足、MaOI等自治体の参画に関するコメントがあった。阪口委員からインドネシアとの協調における省庁としての取組みの深さを問われ、山下室長からはごみ処理問題とは別として海洋プラスチックのモニタリングの手法について解決を試みる旨が示された。

#### ◆e-ASIA

JST・小林部長から、資料4に沿ってe-ASIA共同研究プログラムの紹介があり、WESTPAC、SIMSEAにも関係する海洋機関にも資金供与ができる機関が多く参加し、共同研究には非常に有力なパートナーであること、2015年の理事会で協力分野の中にMarine Scienceが追加されたが海洋科学における共同研究への支援は未施行であることから、JSTが定義する形での支援の可能性が示された。それを受け、安藤委員からDecadeを推進する仕組みはWESTPAC、SIMSEAの観点でも大変重要であること、角南共同議長からはDecadeにおいてe-ASIAのCo-Fundingの活用を期待する旨のコメントが出された。

質疑では、道田委員からDecadeの課題の一つである若手(研究者)育成に因みe-ASIAのプログラムにそうした視点が含めうるかが問われ、小林部長からはe-ASIAの大きな目標の一つとしてアジア地域における人材ネットワークの拡大があり、既存に加え若手のネットワークを完成することでより長期の研究協力が可能になること、公募の評価では若手育成が担保されているかが大きな評価ポイントとなっていることが示された。

#### 2. 4 日本の取組み事例集について

事務局より資料5を用いて、国内外にイニシアチブを示すためDecadeにむけて事例集を作成すること、本会時点で合計50件程度、有識者・関係省庁に加え、経団連の協力により民間事例が多く収集、ユネスコ国内委員会からもリスト供与あった旨の紹介が行われた。次回の研究会で中間報告し年度内の公開を目指すこと、5月末にベルリンで開催予定のDecadeキックオフ会合に向けて英語版を用意することが示された。

#### 2. 5 依頼事項・報告事項(フラグシッププロジェクト等)

引き続き、事務局より資料5に沿ってCall for Decade Actionやホームページ作成、フラグシッププロジェクトについて説明が行われた。

Call for Decade Action (10月15日～1月15日締切)については、植松委員より補足として、現時点では3-5年の大きなGlobal/Regionalなプログラム・プロジェクト、およびContributionとしての資金提供などを先行して受付中であり、各プロジェクトは海域と対応する「チャレンジ」を明示する必要がある旨と共に、各国が活動を活発化する中の日本のリーダーシップの重要性が示された。また道田委員からの補足として、National Committeeの設立、Implementation Planに基づく省庁の対応の必要性が示された。

ホームページ作成については、日本の取組みのプラットフォームとして、海洋政策学会HPのトップから入る形で作っていく方針が示された。

フラッグシッププロジェクトについては、本会後に提案を募集する旨が示された。道田委員からの補足として、今後IOC/国連総会からの見えやすさとしてDecade対応と言えるプロジェクトの必要性や、フラッグシッププロジェクトを明示することの重要性が示された。

## 2. 6 今後について

事務局より、第2回研究会は12月21日を予定とし、引き続き分野別の動向をご紹介いただく(気候変動、防災等)とともに、フラッグシッププロジェクトの議論などを行うこと、1-2月に市民セクターの参加を視野に入れたシンポジウム開催を検討する旨が示された。

## 3. 閉会

閉会に際して、両共同議長より挨拶が行われた。

坂元共同議長：本日の議論では直面している問題が実感できたと思う。これに基づいてさらに第2回研究会で問題意識を共有し、日本のフラッグシッププロジェクトを形成できるように、皆さまの知恵を拝借したい

角南共同議長：今後、事例集は重要になる。英語だけでなく中国語にもして、日本がアジア地域においてDecadeで世界から注目されるためには、我々が中国とどう取り組んでいるかが大事になるだろう。事例集はまだ完全ではなくてNGO等の民間の取組みも必要である。今後のDecadeの中でどう取り組んでいくべきかの洗い出しに活用したい

以上